

結花がここにある理由

蔵の移築の経緯

結花の見世蔵は、以前は埼玉県所沢市元町に於いて「灰屋薬局」として店舗に使用されてきました。

灰屋薬局は、銀座通りと呼ばれる通りに面しており、この辺り一帯は「旧町」とか「旧町地区」などと呼ばれています。江戸時代には、江戸と秩父・多摩地方の交易の中継地として発展し、特に明治時代には織物の集積地として栄えました。

平成7年、その元町地区が「所沢市中心市街地 町並み整備計画」により再開発が計画されました。その結果道路が拡幅されることになり、通り沿いの見世蔵を含む多くの建物が、取り壊しの対象になってしまったのです。

そんな中、現在結花の所有者で、日本の伝統建築を研究・保存・継承運動をしている建築構造家の増田一真氏は、取り壊し対象の蔵の調査をしていた、建築家の大平茂男（おおだいらしげお）氏から連絡を受けます。「取り壊すにはつくづく惜しい蔵がある。生かす知恵を一緒に考えたいのだが。」というのです。

灰屋薬局は取り壊しがすぐ目前に迫っていました。

さて、一方増田氏は、阪神淡路大震災のあと、倒壊した鉄筋コンクリート造や鉄骨造の建物の取材を行う中で、日本の伝統建築が、素晴らしい耐震性を持っていることを再認識しました。つまり、若干傾いてはいても、人が生存できる空間は十分に残されていたのです。

しかしマスコミは一斉に「木造家屋の多くが倒壊し、沢山の人々が圧死した」と報じました。構造建築家から見ると「伝統建築と在来構法は全くべつもの」なのです。

増田氏は「このままでは伝統建築に携わる職人達が立ち行かなくなってしまう」という危機感を覚えました。以来、老体にムチを打ちながら、大工を始めとする職人達、理解ある建築家や工務店を集めては全国を回って、伝統建築（文化）の必要性、抱えている問題などを講演して歩いています。

灰屋薬局に出会ったのは、そんな運動を初めて数年経った時でした。

各地で出会う素晴らしい職人達、そして彼らが造っている建物の素晴らしさに触れる毎に「何としても日本の文化を守らねば」と意を新たにしていくところに、灰屋薬局に出会ったのです。

一目惚れ

問題の見世蔵は、明治8年（1875年）築でした。

一階で使用されている材は「ケヤキ」、二階は「マツ」です。

一階の天井の梁（はり）は、格（ごう）天井で、三尺毎に升目状に組まれています。二階の天井梁は三重に重なっており、かなり重厚な造りです。

特に一階の玄関の大梁は2尺×1尺（600×300）で、長さが4間（7m20cm）もあり、大変見応えがあります。大工さんの話では「樹齢800年ほど経っている」とのことです。

増田氏は一目見るなり、その存在感に圧倒されたそうです。

まさに一目惚れでした・・・。

聞けば「あと一ヶ月で見世蔵を壊し、更地にして明け渡す約束だ」という。「引き取り手は見つからないし、このままでは壊されてゴミ同然になってしまう。どしたらいいものか？」との問いかけに、増田氏は即座に「私が全財産を投げ売ってでも持っていく。」と答えました。「このように価値のある歴史的建造物を取り壊すのは、あまりにも忍びない」との思いからでした。

老後の生活の危機！？

しかしその時、増田氏はすでに60代半ばになっておりました。

泣いたのは妻の美恵子です・・・。

「これまで散々苦勞して、老後になってようやくホッとできると思ったのもつかの間、今度は移築だなんて、あなた気でも狂ったのではないの！？」

そんな妻に対し、増田氏は

「俺の最後の大事な仕事だと思って、どうかやらせてほしい」

と説得し、妻は折れるよりほかありませんでした。

とにかくこうして、灰屋薬局は松戸市下矢切へと移築されることになりました。売れるものは全て売り払い、更に借入れをして、ようやく実現させました。

移築に関わった人々

この蔵の調査・解体・撤去・復元など、結花の移築には、建築家の大平茂男氏、渡辺隆氏をはじめ坪内一雅氏を中心とする若い大工職人たち、真木建設の藤野利雄氏、大原工務所、早稲田大学建築科の学生たち、気仙大工の菅野照夫氏、大野左官工業、藤井瓦工業、三浦創建、武蔵野美術大学建築科の立花直美教授など、その他書ききれないほどの大勢の人々の協力によって結花は今ここに存在しています。

移築は、重機で壊してしまう訳にはいかないのです、瓦を外し、その下の土を叩いて少しずつほぐし、さらにその下の下地板を外し・・・というように上から順にほぐし、外していく作業を地道にやらなければなりません。もちろん、あとでそれらが所定の位置に収まるように、構造材の一本いっぽんに番号を振らなければなりません。

それを一ヶ月で行うことは、容易ではありませんでした。

しかし、先に挙げたように大勢の人々のご協力により、なんとか無事に“ばらす”ことが出来たのです。

結花が存在する意味

結花は木のぬくもりと癒しの空間です。それは、やはり築135年以上という長い年月を経た建物だからでしょう。

しかし本来ならこの蔵は、所沢市のもと建っていた場所で、行政によって維持・保存されていくのがもっとも良い方法だったと思います。

理由の一つは、「移築」を個人が行うには負担が大きすぎるということ。

もう一つの理由は、移築はもとの建物の存在感をそっくり移すのが難しいことです。灰屋薬局の風格や存在感は、重みのある素晴らしいものでした。しかし、蔵自体が無くなりしななかったものの、かつての重厚な佇まいの灰屋薬局は、結花として新しく生まれ変わってしまったのです。

所沢市元町の通りに面した蔵は、全部で40棟ほどありましたが、移築されたのは結花を含めてたったの6棟です。多くの人々の「取り壊し反対運動」の甲斐もなく、通りの蔵は取り壊され、現在は高層マンションの通りになっています。風が穏やかな日でも、この通りには常に“ビル風”が吹いています。

所沢市元町の住民の方々の多くが、町並みを失って初めて存在の大きさ

に気付かされたと言います。

日本の原風景である古い町並みが壊されていく日本の現状の中で、ともかくこうして取り壊しを免れ、移築されたということは、或いは、結花には与えられた責務があるように思うのです。

伝統建築を保存することの意義、守っていくことの大切さを地域の人たちと一緒に勉強したり、更に現代の“使い捨て文化”に対する問題提起・提案をしていくなど、考えていきたいと思えます。

更に、結花に与えられたもう一つの意味。

ここ矢切は、伊藤左千夫の「野菊の墓」の舞台です。「野菊の墓」は、昭和30年製作の松竹映画「野菊のごとき君なりき」で有名になった小説です。15歳の政夫と17歳の民子との淡く、悲しい初恋物語。戦後の混乱期において、その純粹さに多くの日本人が心を洗われたことでしょう。

「野菊の墓」で描かれている風景は、明治時代です。その頃の矢切は、まさに映画の中で描かれたような、多くの古民家が建ち並ぶ、風情ある景色だったに違いありません。

結花は、意図せずしてそのような文学的価値の高い地域に移築されました。つまりそれは、かつての日本の生活の一端を彷彿させる空間として、文化の発信地として、新たな意味が与えられたものだと思うのです。

結花の名前の由来

“結花”の名前の由来は、日本のかつての農村に存在した、労働力を提供し合う助け合いの仕組み＝「結」と、下矢切に咲いた一つの花がやがて地域に実を結ぶようにという願いを込めて「花」という字を合わせています。

これからも、より多くの人々に日本の伝統建築の素晴らしさに触れていただきながら、一方で他方面の方々に知恵とお力をお借りし、文化の発信を続けていきたいと思えます。

平成23年1月 蔵のギャラリー・喫茶 結花 増田 薫
増田美恵子

蔵のギャラリー・喫茶 結花 (ゆい)

〒271-0096 松戸市下矢切89-4 TEL 047-361-2103 日・月定休